

平成28年8月24日

「この人に聞く」成熟社会と建築

鈴木 ひとみ（すずき・ひとみ）氏

プロフィール 1962年大阪府出身。1982年度ミス・インターナショナル準日本代表に選ばれ、モデル、キャンペーンガールとして活躍。1984年交通事故により頸髄を損傷、車椅子生活となる。翌年、身障者国体で2種目において大会新記録で優勝。1987年国際ストックマンデビル競技大会(車椅子競技の世界大会)で金メダル獲得、2004年アテネパラリンピックに射撃で出場。現在、企業のバリアフリーのアドバイス、講演・執筆に携わる一方で、射撃(ピストル)、カーリングの選手としてパラリンピックを目指す。



著書に『命をくれたキス―「車椅子の花嫁」愛と自立の16年』(小学館)、『一年遅れのウェディング・ベル』、『気分は愛のスピードランナー』(日本テレビ出版)。

(前文)

ユニバーサルデザイン啓発講師として活躍されている、鈴木ひとみ氏に自身のユニバーサルデザインへの取り組みなどについて伺った。

### ■ユニバーサルデザイン啓発講師となられた経緯

ユニバーサルデザインという言葉自体はそれほど古くからあるものではありません。私が車椅子生活になった32年前は、ユニバーサルデザイン、その前段階のバリアフリーという言葉もありませんでした。そういう言葉がない頃から講演などの活動をしていました。地方での講演も多く、アクセスもバリアフリーではない状況でしたが、そのうちにバリアフリーという言葉が出てきて、ユニバーサルデザインに展開してきたのは、20年ぐらい前ですね。

法令や条例の整備が進んで、それまで地方講演など活動する上で、様々な不便を感じていたことが、時代とともに少しずつ解消されてきました。ソフト面、メンタルな部分とは足並みがそろっているとは言えませんが、

ハード面が先行する形でバリアフリー、そしてユニバーサルデザインになってきています。

講演の内容も、初めは自分の障害を受け入れる気持ちや、障害者に対する手助けの方法などを話すのがメインでしたが、バリアフリー、ユニバーサルデザインの説明を求められたり、自分の経験を活かして企業にアドバイスしたり、商品開発に携わったり、また建物の検証をするとか、そういう形に変わってきました。講演、執筆、施設評価、商品監修などいろんなことをする。こうした職業を示す言葉がなかったので、自分でユニバーサルデザイン啓発講師と名付けて10年ぐらいになります。

## ■バリアフリーからユニバーサルデザインへ

ある特定の人にとって必要なものであるバリアフリーから、健常者も含め、もっと広範囲の人をカバーできるユニバーサルデザインに移行してきました。ただ、これは高齢者増加によって、マイノリティだった対象者がマジョリティになって、マーケットも意識せざるを得なくなったこともあります。それが結果的により良いものを作ろうという、良いスパイラルになってきた。あとは、東京オリンピック・パラリンピックの決定も影響が大きいですね。2020年に向けて行政から様々な方面に障害者・高齢者対応を目指すよう指針が出ているので、様々な分野で全体的に底上げされてきて、ここまで進むとは思いませんでした。

昔なら車椅子対応の部屋は大手のシティホテルにしかありませんでしたが、条例によってビジネスホテルにも整備されるようになるに伴い、試泊して監修する仕事も増えてきました。また、最近は車椅子専用ではなく多目的トイレになりつつあります。ただ車椅子専用のものもまだ多く、設置スペースや治安対応のため鍵付き管理などで却って不便になっているところもありますが、それが多目的トイレ、ユニバーサルデザインのトイレとして進化し、赤ちゃんのオムツも替えることができる、いろんな人が共有できるトイレに変わってきているので非常に助かります。

設備検証で参加した羽田空港国際線では、多目的トイレ以外でも、一般のトイレもすべて車椅子ユーザーが使えるように設計されていて、これはスーツケースを持って入れる利点があります。今は羽田空港だけですが、これからはこれが標準になっていくと思います。

## ■介助の現場を進化させる新しい技術・制度

講演や執筆以外に、様々な分野の企業から、車椅子ユーザーとしての立

場で監修して欲しいというオファーを受けています。そのうちの一つに介助ロボット開発があって、国の後押しもあり各社頑張っていて、私はトヨタの被験者を長くやっています。コミュニケーションをとるロボットはもう既に介護現場に入っていて、これから目指すのは個人宅で介助できるロボットで、機能面は着実に進化していますが、安全性の面でまだ検証の余地があります。ただし、これが実現すれば介助の現場は大きく進展するでしょう。あと、高齢者・障害者向け衣類の商品開発を監修しています。私がアドバイザー契約をしているのは学生服メーカー(株)トンボで、介護現場で介助する側とされる側両方の服を扱っています。例えば介助される側が車椅子だったとしたら、介助される側の姿勢を考慮したり、介助する側が相手をファスナー等で傷つけないような工夫を凝らしたり、こうした改良は常に続けられています。ただ、私が目指しているのは、機能的でおしゃれなものが、既製服でどこでも安価で手に入る社会です。ただ、ファッションは追求していくとオーダーメイドしかなくて、これはユニバーサルデザインから正反対にある世界です。しかし、それを何とかしたいと考えて、大手企業に提案しています。実現は難しいですがライフワークとして続けています。

また、建築関係の学会などで講演もしています。車椅子ユーザーの声を聞く姿勢を持っていただけるのはありがたいと思っています。ただ、建てる時に、障害者や高齢者の団体など、当事者側がもう少し積極的に参加して、使い勝手をチェックできる仕組みを行政として整備して欲しい。もちろん規定や基準に基づいてはいても、どこか設計者の思い込みで作っている部分があって、完成後にその部分を改修するのは難しいものです。だから、公共性や延べ床面積などの条件や、企業の社会的責任を考慮して、当事者参加の仕組みを作って欲しいです。

## ■仕事と競技の両立

今やっている種目は射撃とカーリングです。射撃は、2004年にアテネパラリンピックに出場しました。2020年東京は微妙ですが、東京だと練習場にも恵まれているので、まだ続けています。カーリングを始めたのは射撃よりずっと後ですが、冬季パラリンピックを目標にしています。東京に常設のカーリング場がありませんので、ホームグラウンドの軽井沢や御代田で練習しています。カーリングのシーズンは9月からなので、これから北海道、青森と遠征していきます。参加している信州チームがバンクーバーパラリンピック出場経験のある強いチームで、そこで強化選手に選ばれま

したので、2018年平昌にまだチャンスが辛うじて残っているという状況です。

こうして競技練習をやりながら、講演、執筆、商品開発や施設・設備の監修の仕事を受けていますので、今後も様々な分野、テーマに積極的に取り組みたいと考えています。